

ラオ・フレンズ小児病院プロジェクト(LFHC)の“今月の出来事 HIV 情報編”

ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の出来事 HIV 情報編です。HIV 感染症は、ラオスではこれから大きな問題になるのでは？という印象です。今回から少しずつですが、統計だけではなく情報収集を始めました。



ルアンパバーンの県立病院には、立派な建物が既にある(ように見えます)のですが、2008年に診療を開始した HIV 専門クリニックもその中の 1 棟にありました(写真左)。

中には抗体検査のためのカウンセリング室、5床の入院施設もありました(写真右)。この検査場では、これまで年間数名の陽性者が見られるのみでしたが、今年 4 月の 1 か月間では、約 60 名の検査希望者が来院し、3 名が陽性。絶対数は少ないですが、増加率をみるとかなり大きな数字です。2013 年 5 月現在、定期的に通院してくる患者さんは 142 名、そのうち 13 歳以下の小児患者さんは 142 名だそうです。



その HIV 専門クリニックの責任者であるピチット医師です。2009 年に HIV 診療の研修を受け、45 日間の病院実習のみで独り立ちせねばならず、試行錯誤で今日まで頑張っているようです。HIV クリニックに常駐する医師は彼女 1 人で、一緒に研修を受けた小児科医 1 名と産科医 1 名と協力しながらの診療を行っているのですが、実質彼女 1 人で成人も小児も担当しているそうです。

彼女に今後の心配を訊ねると、「これまでは 1 人で診療してくることができたけど、今後は簡単ではなくなると思う。結核患者さんと妊婦さんの HIV 検査義務付けと、このところの HIV 抗体検査希望者の急増に、検査キットも不足している状態です」とのことでした。

以前は訪問看護も行われていたのですが、支援が途絶えてしまい、現在は行っていないそうです。HIV 感染症の患者さんと家族にとって、訪問看護はとても意味のあるものなのですが……。再開させるべく LFHC が協力できないか……と頭の中でぐるぐる考えています。

また、ピチット医師は、「自分がしていることを評価してくれる人が必要なんです」と言っていました。国内での情報は限られています。海外で経験豊富な施設への研修を提供することができたら、彼女のモチベーションは更に上がるでしょうし、今後の診療に大きなプラスとなることは間違いないと確信しています。そんなチャンスを作ってあげたいと思います！



HIV クリニックで働いている看護師さんは 3 名。その中のおひとり、ポウリーさん(写真右)にインタビューしました。彼女は 1993 年から看護師として働くようになり、この病棟では 2 年の経験を持つベテランさんです。

HIV に関わり始めた頃は、HIV 感染症の人たちと接することが怖かったそうですが、日々患者さんと話し、人と人としての関わりを持つようになることで段々とその恐怖を乗り越えてきたようです。そして、今ではこの仕事をとても誇りに思い、毎日充実していると言っていました。

カウンセラーとして研修を受けたポウリーさんの重要な業務の 1 つに、患者さんにお薬の飲み方を指導することがあります。ピルケース(写真左)を使ったり工夫をして説明しているのですが、根気のいる仕事ですね。

入院中の患者さん(A さん)にお話を伺いました(ご本人の了解を得て写真を掲載しています)。

A さんは、47 歳の男性。昨年からお出稼ぎで、家具を製作するための材木業者で働いていました。ご両親やご兄弟との仲がうまくいっていないので、ずっと 1 人で暮らしているそうです。今年に入って体調を崩し、体重が激減し、肺結核も併発して県立病院の内科病棟に入院していました。結核患者さんの HIV 検査義務付け制度により、入院中にポウリー看護師から HIV 抗体検査の話聞くことになりました。そして、2 週間前に本人の意思の元で検査を受け、陽性が判明したそうです。

最初は全てを失ったような気持ちだったと言います。しかし、ポウリーさんのカウンセリングが大きな力になったようです。未だ、将来どうなるのだろうか……という不安はぬぐい切れてはいませんが、今はとにかくお薬をきちんと服用して希望を持つようにしたいと言っていました。

医療費は保険で賄われていますが、入院中の食事やその他の雑費には、働いていた時の蓄えから少しずつ使っているそうです。そして、仲たがいをしている家族が会いに来ることは無いですが、金銭のサポートは多少してくれているということです。ただ、長期に渡る出費を考えるとやはり、不安だろうと思います。

A さんには、5 月上旬と下旬の 2 度お会いすることができました。写真は 1 度目の写真ですが、それから数週間後に会った時には、少しふっくらとして顔色もとても良くなっていました。私のことを覚えていて、ニッコリと親しみを込めた笑顔をくれました。そして、「とても元気になりました」と、嬉しそうにしていました。

この笑顔を持ち続けてもらうためにも継続したケアが必要ですね。



「昔はもっと太っていたんです」と語る A さん



不安そうな表情の B さん

B さんも入院中の患者さんです(ご本人の了解を得て写真を掲載しています)。24 歳の男性。奥さんは 20 歳で、2 歳の娘さんがいるそうです。家族でタイの建築現場へ出稼ぎに行き、5 年が経過しているそうです。体重減少、下痢など体調を崩して、タイで検査を勧められ受けたそうです。2 か月前に陽性告知を受けましたが、それまで HIV に関して全く知らず、陽性結果と共に HIV について話を聞いた時には、もう何も考えられなかったと言っていました。

タイで医療を受けることはお金もかかり大変なので、今は家族をタイに残して 1 人でラオスへ戻ってきているそうです。奥さんには B さんの HIV 感染のことはまだ知らされていないのだそうです。したがって、奥さん、娘さんはまだ検査をしていないということですが、B さん曰く「彼女も娘も元気だから……」と、告知をすることも躊躇している様子でした。もちろん感染していない可能性もありますが、もし感染していた場合には早期治療がその後の状況に大きく影響するので、B さんが決断してくれることを祈るばかりです。ただ、B さん自身もまだ自分の状況を乗り越えられていないようですので、ボウリーさんたちのカウンセリングがキーとなりますね。これから難しいケースが増えてくる可能性があります。カウンセリングのスキルアップも重要になるでしょう。

HIV 感染症の C ちゃん(12 歳)のご家族を訪問しました。35 歳のお母さんは、体重減少、慢性の副鼻腔炎が治らず、1 年以上も複数の病院へかかりましたが原因が分かりませんでした。その間に費やした医療費のために、家を 1 軒売ることになってしまったそうです。そして、ビエンチャンの病院で受けた HIV 抗体検査で陽性告知を受けたのが 2007 年でした。

その時お父さんは無症状でしたが、やはり陽性。希望を失い毎日アルコール浸りでいた時に髄膜炎を発症し、「これではいけない」と自覚し、生活を立て直し始めたのだそうです。

今ではお父さんもお母さんも HIV 感染症者同士の教育担当として、県立病院や感染症者の会でリーダー的存在になって頑張っています。C ちゃんは、今 5 年生。「学校へ行っているときが一番楽しい！」とニコリ。

一時は村から疎外され、差別された経験があるそうです。C ちゃんも学校内で「こっちへ近寄るな！」と言われたことがあったそうです。その後、村全体でミーティングを重ね、今ではみんながサポートしてくれているそうです。

周囲からの大きなサポートがあっても、やはり、今後の体調や経済的なことはいつも気にかかっているそうです。こうしたストレスが少しでも軽減できるようなシステム作りが目標です。

(ご家族のご了承の元、修正なしの写真を掲載しております)



C ちゃん宅は親戚の方が提供してくれているそうです



D さん(25歳男性)も入院患者さんです。オフィスで働く公務員だそうです。体重激減、腹部のリンパ腺腫脹、カリニ肺炎(HIV 感染症者のような抵抗力が落ちている人が罹患しやすい肺炎)、結核を発症し、HIV 抗体検査を受けることになったそうです。1 か月前に陽性結果を受け取りました。D さんは 8 人兄弟の 5 番目(3 男)で、未だ 1 番下の妹以外には誰にも結果については話していないそうです。「家族が心配するから……」と、話す事を躊躇しているようです。私が病室へ行った時にもたくさんのご家族が面会に来ていて、病状をととても心配している様子でした。

2 週間前から抗 HIV 剤の服用を開始し、今のところは副作用なく経過しています。身体の抵抗力を見る血液検査(CD4 正常値 700-1500)の値は 5。抵抗力はほとんどないようなものですね。

D さんも将来のことを考えると不安になると言っていました。「まだ結婚もしてないのに……」と。自分自身の仕事、結婚、収入、病状、将来に対する不安、家族に対する気持ちなど、色々なことで頭がいっぱいになってしまうだろうなと思います。

病気に対するケアだけでは足りないのです。患者さんを取り巻く全ての要因へアプローチできるようなケアの確立が必須だな……と実感です。

(ご家族にもお話していないということで写真は撮りませんでした)

これまでの視察の中では、HIV 感染症に関する統計上の数字は絶対数が少ないということで「ラオスでは HIV の問題はないのかな……」と思っていました。また各部署でのインタビューからも「感染者は少ない。問題は大きくなる前に対策が取られた」という理解でいたので、今回の現場での実状を見て、“今後”がかなり気になる結果となりました。感染症者は増えているにもかかわらず、支援は縮小している部分もあるようなので、そのあたりの現実もこれから見ていきたいなと思います。

HIV 感染という繊細な内容であるために、他紙への転載や外部への転送は、お控えくださいますよう、よろしくお願いいたします。

Friends Without A Border 赤尾和美